平成１７年(昭和８０年)１２月５日（月）

東海の古代

第　６７号　編集・発行　古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川 1-729
メール frttokai@zm.commufa.jp
電話/FAX 052(936)5012
郵便振替 00870-5-30752

今年最後の通信になりました。

１１月例会は古賀達也さんの講演会を兼ねたのですが、参加者は１７名（古賀さん含む）、当会始まって以来の盛会となりました。皆さんのご協力を感謝いたします。

斉明天皇。皇極復位。元年は乙卯。白雉を用う。六年庚申、始めて漏刻を造る。七年辛酉、白鳳と改元し、都を近江州に遷す。在位七年。寿六十八。

（海東諸国紀）

古賀さんの講演はこの史料で始まりました。海東諸国紀は、李氏朝鮮の国家的事業で編纂された文献であり、著者の申叔舟は当代きっての知識人であり、政治家だったことから、きわめて信頼度の高い文献である。掲載された九州年号は、二中歴の方が原初性に優れるが、その年号の後に続く記事はじゅうぶん信頼できる。むしろ日本側文献より客観的に日本古代史を記述できている。そう評価できるのではないか。

ということで、日本書紀はじめ日本側文献では、近江遷都は天智六年(667)になっているが、海東諸国紀は九州王朝の記憶を伝えており、斉明七年(661)遷都が本当の史実ではないか、という説だったと思います。九州王朝の一派が、白村江の戦いを前に緊急避難的に遷都を行ったのではないか、という仮説は日本書紀のあちこちにある年代のズレや、記述の不審で裏打ちできる、といった話は実に興味深いものでした。稲員家系図の話や古田先生の近況など多くの情報も聞けました。

せっかく話題をいただいたのですから、１２月例会で、更に議論を深めていきたいものです。

７世紀後半に何が起きたのか。九州王朝から大和王朝へどのように移行したのか。考えてみませんか。

例えば、筑紫君薩野馬は普通「尾羽打ち枯らして」唐から帰還したようにイメージされますが、本当にそうか。百済や高句麗の王族のほとんどは唐に連れ去られたまま、歴史の闇に消えていきました。大伴部博麻の美談ごときで帰国できるはずがありません。唐の意図が働いていたことは明らかです。戦後処理の任務を帯び、むしろ颯爽と新指導者として還ってきたのではないでしょうか。ところが朝鮮半島の情勢急変（新羅による半島統一）で唐の目論見が崩れてしまったというしだいではないでしょうか。

また近江京は、本当に近江国にあったのか。未だに滋賀県で都の跡地と断定できる遺跡は発掘できていません。近江とは、近江国でなく「海の近く」という程度の意味かもしれません。

古田先生自身は、九州王朝が白村江の戦い以前に長野遷都を計画していた可能性を考えてみえます。滋賀にせよ、長野にせよ、九州の民を捨て政権だけで移動するのは可能なのでしょうか。検討してみませんか。

二倍年暦逍遥

寒過ぎて　暖来たるらし　朝鳥さす　春日の山に霞たなびく（万葉集 1844 番）

以前も類似の歌で「寒過ぎて暖の来るれば年月の新たになれど人は旧りゆく（1884 番）」を紹介しました。春夏秋冬は季節を四分する発想であり、それに対し寒暖は二分、それをフユ、ハルと読むのは無理があるのではないか、ということでした。集中に一切、暑や涼は無いのです。

もっとも、それでは寒・暖にどんな読みを与えたらよいか、今の時点ではわからないのが残念です。おそらく去年、今年にあたる語を探せばよいのでしょうが。

短里逍遥

梓弓　末振り起こし　投矢以ち　千尋射渡し
剣大刀　腰に取り佩き　あしびきの……

（万葉集４１６４番）

以前「古田史学会報」でも「わたしひとりの八咫烏」と題して発表させていただきましたが、古代において、尋(ひろ)が３０センチ程度を表していたのではないかと提案しました。古田先生が主張された短里の実在は、単に里だけでなく、長さの体系として通常とは違う短い系列の存在が予想されます。尋は通常、両手を広げた長さとされますが、この歌のように弓矢の射程が千尋とは尋常ではありません。古代人は誇大妄想癖と切って棄てればよいのですか？

１２月例会に参加を

日程：１２月１８日(月)午後１時～4 時半
場所：名古屋市公会堂第３集会室（２階）
名古屋市昭和区鶴舞１丁目 1－３
地下鉄鶴舞線「鶴舞」下車４番出口徒歩２分
ＪＲ中央本線「鶴舞」下車公園出口徒歩２分
参加費：500 円(維持会員は無料)

今後の予定

１月例会：１月８日(日)
２月例会：２月１９日(日)

例会はなるべく毎月第２日曜日にしたいのですが、会場の都合等によりしばしば変則的になります。日程をよく確認しお出かけください。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。

なお例会終了後、忘年会を予定しています。(毎月のようにしていますが)

大阪新年講演会

期日：平成１８年１月２１日(土)
午後１時半より午後４時半
場所：大阪市立総合生涯学習センター
大阪駅前第二ビル
第１研修室
（ＪＲ大阪駅中央出口南５分）
ＪＲ北新地駅すぐ
（電話０６－６３４５－５０００）
※場所の問い合わせのみにして下さい
挨拶：「浦島太郎は南米に行った」
代表　水野孝夫
講演：子孫が語る浦島太郎の系図と伝承
講師：森茂夫氏(古田史学の会会員)
主催：古田史学の会(全国組織)
参加費：７００円
※午前中（１０時から）第６研修室で関西例会

日本書紀･万葉集にすでに紹介され、丹後国風土記から御伽草子へと発展変化していく浦島太郎伝説ですが､歴史学としてどこまで分析可能か大変興味があります。ぜひ参加を。

ご承知かもしれませんが、地元愛知県の知多半島にも浦島伝説が残っています。武豊町地内、名鉄富貴駅周辺に関連地が分布しています。

乙姫橋に浦島神社、助けた亀の墓がある真楽寺、玉手箱が奉納されている知里付神社、浦島橋の下には浦島川(溝？)も流れています。そこを下って浦島太郎が竜宮へ出かけたという話です。近くには浦島屋敷という地名も残ります。各所に説明の看板が立っています。

浦島神社は竜宮保育園の脇にありますが、カメラをぶらさげ徘徊する中年男には幼児すら冷たい視線を送るだけです。まだ若いのに郷土史探求に取り組む奇特な人と、声をかけてくれる地元民もいません。たいした取材はできませんでしたが、１２月例会で報告します。

古書即売会

第５３回倉庫会
古書即売会

最近の名古屋古書会館の古書即売会は、下記のように開催されます。今回に限り、女性は全商品１割引販売！

期間：１２月２３日(金)～２５日(日)
時間帯：午前 10 時～午後６時(最終日は５時迄)
会場：名古屋古書会館
名古屋市中区千代田五丁目１番１２号
TEL(052)241-6232　FAX(052)252-0992
(電話・ファックスは会期中のみ)